

博物館実習を終えて

○9月26日から10月8日にかけて、博物館実習させていただきました。一般の来館者よりも長い時間博物館に居れましたので、展示について私が気に入った点について書こうと思います。レプリカについて。学芸員の方から、展示物の中にはレプリカがいくつか混じっていることを聞かされたので、どれぐらい自分で見分けられるか展示室をまわってみました。その結果は…。書いてしまうと、これを読んで下さっているあなたの楽しみを一つ無くしてしまうことになるのでヒントだけ書きます。当博物館は展示物を「観る」だけではなく「触れる」事もできるのが特徴です。展示物を御自分の手で触ったり撫でたりしてみてください。「地球」展示室がお勧めです。比較について。「地球が生んだ様々な生物種」は大昔から現在まで、また様々な生物を一度に見渡せるようになっていきます。私は骨格について、種による違いや進化による形の変化などに興味を持ち、一ヶ所(カピバラ剥製の前)に座ってかなりの時間観ていました。私は特にこの2点が気に入って展示に接していました。次にあなたが見学するときの参考になればうれしく思います。

谷地森 修二(日本大学農獣医学部)

○企業に就職が決まっていた私は、実習を申し込んだものの学芸員の資格を所得しても生かすことができないであろうという思いから乗り気ではありませんでした。実習を資格所得の為としか見ていなかったためです。

2日間の講義ののちに動物班に入りました。動物班といっても班員は私を含め2名でした。もう一人の班員である谷地森氏は、私の大学の先輩で動物、特にタヌキが御専門でした。私はと云えば動物については全くの素人でした。言い訳がましいのですが、私の専門はクラゲで、クラゲといえばプランクトンの世界の生き物です。よく動物と考えられるがだいぶ世界が違います。困ったことになったと思いました。しかし、実習をしてみると一から十まで知らな

いことばかりなので面白くて仕方がありませんでした。一日8時間の実習時間があまりにも短く感じました。

実習で得たものがあります。一つは苦手だった鳥類が怖くなくなったことです。これは、剥製の製作の時に有無をいわず触らされたのがきっかけになりました。そしてもう一つは、博物館の展示を今までとは違う意味で楽しめるようになったことです。そして何よりも動物に興味をわいてきたことです。学芸員実習で多くの方々にすっかり洗脳され、近々行われる谷地森氏紹介のタヌキ解剖の日を楽しみにしています。

佐藤 留美子(日本大学農獣医学部)

○博物館実習に行く前に、私はどんな事をやるのだろうかと色々想像しました。その内容については触れませんが、半ば当り半ばはずれた、と思います。それほどまでに学芸員が普段何をしているかはわからなかったのです。もちろん研究をしているという事は知っていたが、それが実習内容になるわけがないという事も自明でした。実際の実習の相手は、博物館の展示を支える標本であり、その整理などを通して、博物館はいかに多くの標本をかかえているのか、またその多量の標本があつてこそ、展示の質を維持できる、という事を学びました。この事から博物館の使命ともいえるべき生涯教育への貢献を達成するには多数の標本とそれを研究する人間、さらにその展示物を外に向かって広める人間の少なくとも三種類の人間が必要だと思いました。いずれはこの分業ももっと進むものと思います。また実習中に印象に残った事は、館内を最初から最後まで説明しながら案内した事です。説明の内容、マナー等行き届かない事ばかりだったと思いますが、それでも私の話に耳を傾けて下さり、私にとっても大変よい経験になりました。最後にこの貴重な経験を得る機会に巡り会えた事と、その間にお世話になった方々にお礼を申し上げます。

名取 瑞樹(横浜国立大学教育学部)

○博物館実習の日数を含めると、生命の星・地球博物館へは、12回来たことがあります。にもかかわらず、博物館にはいつ来ても「魅力」があふれていました。博物館の特色は、やはり、「実物にさわれる」点にあると思います。再編前の神奈川県立博物館は、複製展示が多く、「レプリカ博物館」などと言われていました。しかし、生命の星・地球博物館ではこの点が改善され、観覧者の要求にえています。開館から半年が経過して、1階の展示室の「アンモナイトの壁」が多くの観覧者にさわられて、光沢がでていることから博物館の特色が理解されていることが分かります。休日や雨天日は、博物館が大勢の観覧者でにぎわいます。館内にロッカーや食堂も設置され、博物館は箱根登山鉄道沿線の新名所として定着しているのではないのでしょうか。観覧者には、ぜひ、北側に隣接する県立温泉地学研究所の展示室も見たいと思います。最近、全国各地で新しい博物館が次々と開館し、「展示物に直接さわれる」博物館もふえてきています。そのため、生命の星・地球博物館には、今後も「魅力」のある博物館であり続けることを期待しています。

渡辺 学(法政大学文学部)

○私は生命の星・地球博物館で、9月末から10月初めにかけての8日間、博物館実習生として指導を受けました。実習期間中は、学芸員の方々などの説明を受けながら、博物館を内側から眺める機会を持つことができました。この博物館で実習をして、私が最も感じたのは、もっと沢山の人々に博物館を身近に感じてもらいたい、ということです。例えば、小・中・高校生など無料で入れる人も多く、2Fのライブラリーは誰でも無料で使用できます。またライブラリーには学芸員の人がいつもいますから、直接質問することもできます。常設展示も、この博物館ではストーリー性を重視した構成になっているので、私たちの住んでいる地球がどのような過程を経て現在に至っているのか、動

物や植物はどんな進化をしてきたのかという大きな流れを、天井の高い広い展示室でのびのびと実感することができます。さらに、いろいろな展示物を触って確かめることができるのも、この博物館の魅力だと思います。博物館の学芸員はたくさんの標本や化石を整理・研究して得られたことを、皆さんに広めていこうと考えています。実習をして私は、博物館は「誰でも開けられる知識の宝箱」だと思いました。

宇佐見和子（横浜国立大学教育学部）

○私はこれまでいろいろな博物館を見学してきましたが、展示（物）に対しては「きれいな石だ」「大きな化石だ」等幼稚で端的な感想しか抱いてきませんでした。目の前にある展示物を自分の

主観だけに基づいて受け取っていた訳です。しかし、博物館実習中、学芸員の方に、展示物を媒介にした博物館サイドと来館者との意志疎通の重要性を強く感じました。展示物には個々に意味があるはずですが、でも、一般の来館者にとって、そこまで理解するのは、主観を越える問題でもありなかなか難しいことだと思います。それでもなお展示物の意味をいかに来館者にわかってもらえるか、展示方法など細かく考えている学芸員の方達の姿を見て、博物館の新たな一面を知った様な気がしました。

斉藤 紀子（横浜国立大学教育学部）

○博物館での実習は一週間程度の短い期間でしたが、とても貴重な経験をすることができました。これまでに、大

学で博物館学の講義を受けてきましたが、比べものにならないくらい多くのことを学ぶことができました。私自身、博物館学、美術館が好きでよく訪れますが、あまりに知らないこと、気づかないことが多かったように思います。細かく計算された展示方法、よりすぐれたものが、本当に長い時間煮詰められてきた結果だったのです。それでも、オープンして初めて分かるミスもありました。さらに改善され、常に変化していくのです。生命の星・地球博物館は、まだまだ生まれたばかりの博物館です。準備の段階から携わってきた多くの方々の深い愛着を感じます。そしてこれから、ますます魅力的な博物館に育っていくことを期待しています。

小幡 貴子（横浜国立大学教育学部）

ジプティ共和国大統領生命の星・地球博物館を訪問

平成7年9月6日、アフリカのジプティ共和国のグーレド・アプティドン大統領が生命の星・地球博物館を訪問され、当館濱田隆士館長の案内で岩石などの展示を観覧されました。ジプティ共和国は、地球の熱放出の現場を



図1. ジプティ共和国の位置。

具体的に示す岩石「トラパーチン」を産出する国として有名です。

生命の星・地球博物館の「地球を考える」展示室にも地球の様々な活動を示す貴重な資料として、このトラパーチンが展示されています。エントランスホールで、手作りのジプティ共和国の国旗を持った大勢の来館者と博物館職員が出迎えると、同大統領はにこやかに手を振り、温かい歓迎にこたえて車椅子の観覧者達と握手を交わしました。

濱田館長から説明を受けた後、同大統領は、岩石展示などを興味深くご覧になり、「遠く離れた日本で自分の国の岩石が立派に展示されているのを見ることができるのは、非常に意義深い。こ



図2. 帽子をかぶっている人がジプティ共和国大統領、左端が当館濱田館長。

の岩石が日本と我が国の友好のあかしになると信じております。」と感想を述べられました。同大統領は、9月8日、離日されました。



図3. トラパーチンの採集から展示まで。

1. ジプティ共和国ハンレ地区の砂漠の中に残されていたトラパーチン。
2. 採集現場での作業風景。
3. 展示室へ導入する前の工場仮組み上げ。
4. 展示室での最終仕上げ作業。
5. 展示完成。